【資料2】登録番号　59

『華族女学校第一期卒業証書授与式演説　明治二十二年七月』

一冊。袋綴。二八・五糎×二〇・四糎。白色仮紙表紙。外題「明治二十二年七月／華族女学校第一期卒業証書授与式演説／草稿」（後人補記、中央に打付ペン書）。表紙右下にラベルシール貼付（S／コ59）。内題一丁表「明治廿二年七月十八日第一期卒業証書授与式の節演説」。料紙、華族女学校用箋〔版心下部に「華族女学校」とある朱罫紙、四周双辺（二一・三糎×一四・六糎）、有界、毎半葉十三行、毎行不定字〕、前後遊紙なし。墨付十丁。印記、「実践女子大学図書館印」の長円形単郭朱印（一丁表右下）、十丁裏匡郭下余白中央「コ56」印。

後半六丁〜十丁は、前半一丁〜五丁までと同内容の文章が繰り返されているが、口語体で書かれ、文章の順と送り仮名等に異同がある。前半は整然と清書された書体であるのに対して、後半は書き入れや修正がなされ、草稿のように見える。そこから推して前半と後半は別々に書かれ（おそらくは後半が先に書かれたか）第三者によって合綴されたのではないか。また、前半一丁〜五丁に付された記号「（朱）」は、演説するにあたってアクセントの指標として付されたものであろう。

また、前半一丁〜五丁は、『華族女学校第四年報　自明治廿一年八月　至同廿二年七月』（附録　行啓其他記事）に「学監下田歌子演説」として採録。本資料との相違点は、以下のとおりである（該当箇所に注1〜6を付して示す）。

なお、本演説に関する資料は、現在、学習院アーカイブズに未所蔵〔桑尾光太郎氏にご教示いただいた。記して、深甚の謝意を表します〕。華族女学校・学習院女学部永田町校舎は、明治四十五（一九一二）年に火災で全焼、女子学習院青山校舎は昭和二十（一九四五）年に空襲により全焼しており（『学習院女子中等科女子高等科　125年史』改訂版、二〇一四・平成二十六年）、その際に焼失した可能性も残される。

注

1　今日
2　そも〳〵
3　幾万人
4　「の」、なし。
5　「め」、なし。
6　臨ミても

「明治二十二年七月　華族女学校第一期卒業証書授与式演説　草稿」（表紙）

（白紙）」（見返し）

明治廿二年七月十八日　第一期卒業証書授与式の節演説」（内題）

今日は辱なくも「我が（ママ）皇后陛下、本校に御親臨遊ばされ、「本校生徒卒業式、並びに、本校移転式を、御覧ぜらる。「実に、開校以来の、盛典なり。「且つ、朝野貴紳の、斯くも、賁臨なりしハ、「本校の面目、此上も無き事と云ふべし。「感謝、胸感に満ちて謝辞（オレイ）ハ、口に申し尽（カシコマリ）し難し。「さて、今日の、（ママ）大御旨の奉答、「又、新校移転の事抔ハ、「校長、及び、幹事よりも、云はれたれバ、「余（ワタクシ）ハ、是より、卒業生徒に就きて、概略（アラマシ）を申し上げん。「本校ハ、明治十八年、九月の創設にて、「爾来、年を閲（フ）ること五年、「即ち、第四学期を経て、「今回、始めて、全科卒業証書を、授与せらるゝなり。「其人々ハ、高等中学科一級生、井上郁子、萬里小路久子、黒川千春子、三島園子の四名なり。「元来本校の学制によれバ、小学初年より、中学の終り迄、「満十二ヶ年の、修学をなさゝれバ、業を卒る、こと能はず。「されど、此人々が、本校へ入学したるハ、「即ち、本校開始の当時にして、「既に、応分の学力ありし故、「入学試験の成蹟（ママ）によりて、「初等中学一級に、編入せられしなり。「其れより、本校にある事、「満四ヶ年間、「蛍雪の労を積みて、「今ハ、[注1]和漢文欧語、数学、地理、歴史、物理、化学、博物、生理、教育、家政、裁縫、習字、図画、音楽、体操等の、各学科を、全く卒へて、「此盛典に、あふの栄に達せしなり。

「さて、これよりハ、卒業生徒の、方々に申さん。「古来、我が国の女子ハ、「そも、[注2]幾億万人かありし。「而（サウ）して我が（ママ）皇后陛下の、御令旨によりて、建てさせられたる、「本校の如き、校舎に入りて「教育を受けたる者、幾人かありし。「更に、一人も無かるべし。「今、啻（ただ）、嬢（アナタガタ）等あるのみなり。「若し、余の如きものも、嬢（アナタガタ）等と、齢を同じう」（一・オ）

」（一・ウ）

する時に生れて、「嬢等（アナタガタ）と、斯くの如き校舎に入りて、「完全の教育を受くるを得バ、「将来の楽しみハ、如何許（イカバカ）りならん。「嬢等の幸福ハ、実に羨むべき也。

「凡そ、人間一生の、禍福の分るゝ所ハ、「実に、幼き時の、習性、即ち教育の、如何にある也。「故に、道を学び志しを立て、「行ひを正しくし、「能く、其徳を全うするに至るハ、「全く、其幼き時、習性の良きに、よるものなり。「我々が如き、学ばんと欲するも、校舎なく、「修めんと欲するも、師に乏しき僻地に生れ「然（シカ）も、婦人は、「僅に、人類の一部たるに、過ぎずと、云はれし時代にありたるものすら、「今日あるに至りしハ、「実に、僅に、志したる、学びの道の恵みなり。「然るに、嬢等（アナタガタ）ハ、「多年、此校にありて、「能く、其道を学び、「其忠君愛国の精神ハ、「素より、他に譲る事なく、「其父母に孝なる、「兄弟姉妹に友愛なるハ、「云ふ迄もなく、「人の婦となるに至らバ、「其貞其節、「おさ〳〵往古の、節婦貞女にも譲る事なく、「又、人の母となるに至らバ、「嬢等を、嬢等の父母の、愛育したると同（ママ）しく、「能く愛し、能く慈（ママ）み、「且つ、嬢等が、自から、学びたる道を以て、「能く、其子を薫陶せられんにハ、「今古の、賢母、慈母にも必ず、恥づる事なかるべし。「假（タトヒ）令、嬢等ハ、将来如何なる境遇に立つとも、「畢生の行為ハ、此精神に背く事なきハ、「余（ワタクシ）の、固く信じて、疑はざる所なり。「これ、畢竟、嬢等が、天資の然らしむる所なる可けれども、「抑も、又多年、刻苦勉励の、効果と云はざるを得ず。

「今、嬢等（アナタガタ）ハ、学業を卒へて、「此校を去らるゝなるが、「これよりハ、如何（イカニ）して、学問をなさんと、思ひ給ふか。「学問の道ハ、嬢等、終身、廃棄すべからざるもの也。「学問の光りハ、能く世路を照らして、「嬢等をして、暗夜に、さまよふ事なからしむべし。「学問の力ハ、「能く百難を凌ぎ、「千辛万苦に堪へ、「常に嬢等をして、安全の、[注4]地位に立たしむべし。「学問の効ハ、「能く、嬢等の志しを達せしめ、「其行ひを正しくし、「其徳を高からしめ、[注5]「凡そ、嬢等畢生の、保護者となる也。「されバ、嬢等ハ、如

」（二・オ）

」（二・ウ）

何にしても、「学問を、廃棄する事ある可からず。「学問といへるものハ、「師に就き、書冊を携へ、「終日の誦読を、専業とする、のみのものに非ず。「幼少の時、学校に入りて、「修学したりとて、「其学問の筋道を探り、「其区別を、知りたる迄の事なり。「学問ハ、これ迄、嬢等がなせる方法の外ハ、なきものと、思ふべからず。「今、嬢等が、此校を出でらるゝハ、「更に、これより、世間（ヨノナカ）といふ、大いなる学校に、入るべき進路なりと、思ひ給ふべし。「日々、履むべき課業ハ、「忠なり、孝なり、悌なり、信なり。「皆其学問ならざる者なし。「これ、即ち、修身の実学なり。「又、其家事を執るに至らバ、「自から、衛生なり、育児なり、教育なり、数学なり、裁縫なり。「許多（アマタ）の課業を、実

」（三・オ）

地に学ぶものなり。「又世務に当（ママ）れらハ、「或は、交際し、「或ハ、旅行し、「或ハ、通信往復する等、「即ち、文学なり、地理なり、歴史なり、動植物なり、図画なり、習字なり、音楽なり、「総べて、応用の、学科ならざるハなし。「而（サウ）して、猶、書籍に就きても、学ばんとならバ、「其実務をなしつゝも、これをなし得べき、余地ハ幾ばくもあるべし。「天地間何ものか、学問の、資けならざらん。「世間、何ものか、皆、己れの師ならざらん。「彼の薪を採り、「潮を汲みても、和歌を口ずさみ、「砂に跡をつけ、「蒲を編みても、文字を習ひ得たる例し、あるに非ずや。「此他、嬢等（アナタガタ）が、既に、読み来れる所の、史伝中、「これらの類ハ、猶、許多（アマタ）ありしなるべし。「況（マシ）て、嬢等ハ、生れながら「我が国、貴女の地位を保たるゝなれバ、「学問の余裕、猶、幾ばくもあるべし。「否々、嬢等ハ、「今より、世間といふ、大学校に入りて、自から、修業せざるべからす。（ママ）「たゞ、其然ると、然らざるとハ、嬢等が、志しの、一点に存せりと云ふべし。

」（三・ウ）

「更に、進んで、また、一言せざるべからず。「これ、他なし。「目下、日本婦人ハ、殊に、至難の地位に、立てりといふ事、是なり。「嬢等も、これより、世に交はるに及ばゝ、「実（ゲ）に然（サ）る事ありと、覚（サト）るべき也。「これ、恰も、世運の変遷と同じく、「女子の風儀の、進化する時代に於て、「免（マヌカ）る能ハざる理数にして、「実

に、また、為ん方もなき事なり。「此時に当りてハ、たゞ、何事も、己れを守り、「道を踏み、「更に余念なき、覚悟なかる可からず。「さて、女子たるものハ、「先づ、優にやさしく、大らかに恭しかるべし、「例へバ、麗々（ウラ〳〵）と、長閑（ノドカ）なる春の花園に、「吹くとしもなき風の、打そよぎて、「これに向はん人ハ、自（身）から、心も緩やかにおぼえて、「打ちも笑まれぬべくぞあらまほしき。「されど、柔（ママ）かなるがよしとて、事に臨みて、[注6]「立てる操もなく、「なよ〳〵」として、あれかしと云ふにハ非ず。「女の徳ハ、「寒松の霜雪に堪へ、「垂柳の暴風（アラシ）に打れぬ、力にも、譬へ、「柔かなる中にも、「一節（ヒトフシ）、犯し難き所あるべし。「総じて、

」（四・オ）

内ハ剛に、外ハ柔なるぞよき。「これらの事を記憶して、「能く、これを実施に、施されなバ、「また、大いなる過ちなかるべし。「されど、嬢等（アナタガタ）、能く、道を行ひて、己れに恥づる、事なしと思ひたりとも、「世の人の、口さがなく、「さま〳〵の怨み、嫉みにあひて、「或ハ誹られ、或ハ、罵らるゝ事も、あるべけれど、「心短く、之に逆らハず、「いよ〳〵、詞を慎ミ、「行ひを修めて、「静に時を、待たざる可からず。「嬢等、忍耐、寛裕、沈勇の三つのものハ、「男子の、所為のみに非ずして、「却りて、女子の特有なりと、悟られよ、

「以上、説く所ハ、「嬢等が、此校にありて、修学したる事の、「一部のみに過ぎず。「されど、今嬢等が、此校を去らるゝなれバ、「改めて、一言の贐けを、呈するなり。「嬢等、能く、之を務め、「時々、此精神を喚起して、「造次顛沛も失却すべからず。

「今嬢等ハ、「本校生徒、幾百人に先ンじて、卒業したり。「今日の盛典

」（四・ウ）

にあはるゝハ、「真に日本女学生中、無上の栄誉を負ひ、「又、無上の責めを担はれしなり。「嬢等ハ、本校生徒、幾百人の模範にして、「而（サウ）して、「将来日本貴婦人の、模範たらざる可らざる、地位に立てり。「若し、万一、道に戻ることもあらバ、「これ、たゞ嬢等一身の、恥ぢのミならんや。「上ハ、畏くも我が（ママ）皇后陛下に対し奉り、「其罪避り所なかるべし。余（ワタクシ）も、亦、本校学監の任にあたりて、「いかで、世に、面を向くることを得べき。「余が、

畢生間の希望も、「こゝに至りて、絶滅すべし。「こゝに、これを嬢等に契り、「併せて、満堂の貴女紳士に謝す。

華族女学校学監
下田歌子

（以下余白）

」（五・オ）

（白紙）

」（五・ウ）

今日ハ、辱なくも我が（ママ）皇后陛下、本校に、御親臨遊ばされ、本校生徒の、卒業式、並ニ、移転式を挙行するのハ、実に、開校以来の、盛典でござりまして、且つ、朝野の貴紳、かくも御出下されたるハ、本校の面目、此上もなきことでござります。感謝、胸間（ムネ）に満ちて、御礼辞ハ、口に申し尽し難きことでも御座ります。さて、今日の、御大旨のかしこまり、又、新校移転のこと抔ハ、校長、及び幹事よりも、云ハれました故、余（ワタクシ）ハ、是より、卒業生徒に対する、概畧を申し上ませう。本校ハ、明治十八年、九月の、創設でござりまして、爾来、年を閲（フ）ること、五年、即ち、第四学期を経まして、今回、始めて、全科卒業証書を、授与せらるゝことでござります。其人々ハ、高等中学科一級生、井上郁子、萬里小路久子、黒川千春子、三島園子の四名でござります。元来、本校

」（六・オ）

の、学制に、よりますれバ、小学初年より、中学の終りまで、満十二ヶ年の修学を致さなければ、業を卒へることハ、出来ませんので、ござります。されど、此方々の、本校へ入学したるハ、即ち、本校開始の当時にして、既に、応分の学力ありし故、入学試験の成績によりて、初等中学の一級に、編入せられたのでござります。其れより、本校にあること、満四ヶ年間、蛍雪の労を積みて、今ハ、和漢文、欧語、数学、地理、歴史、物理化学、博物、生理、動植物、教育、家政、裁縫、習字、図画、音楽、躰操等の、各学科を、全く卒へて、此盛典に、あふの、栄に達したのでござります。

さて、これからハ、卒業生徒の方々に、申しませう。古来我国の女子ハ、そも、幾億万人あつたでござりませうか。さうして、我が、（ママ）皇后陛下の、御令旨によりて、建てさせられ

たる、本校の如き、校舎に入りて、教育を受けたる者が、幾人ありました

」（六・ウ）

らう。一人もござりますまい。今、あなた方が、あるのみです。若し、余（ワタクシ）の、如きものも、嬢等（アナタガタ）と、齢を同（ママ）うする時に生れて、嬢等と、斯くの如き、校舎に入りて、完全の教育を受けましたならば、これから、先きの（ママ）楽しみは、如何斗りでござりませう。あなた方の幸福ハ、実に羨むべきことであります。

凡そ、人間、一生の禍福の分るゝ処ハ、実に、幼き時の習性、即ち教育の、如何によることであります。故に、道を学び、志ざしをたて、行ひを正しくし、能く、其徳を全うするに至るハ、全く、其幼き時、習性のよきに、あることであります。我々が如き、学ばんと欲するも、校舎なく、修めんと欲するも、師に乏しき、僻地に生れ、しかも、婦人ハ、僅かに、人類の、一部分たるに過ぎずと云ハれし時代にありたるものすら、今日あるに至りましたのハ、実に、僅かに、志したる、学びの道の、恵みであります。然るに、嬢等ハ、多年、此校に在りて、

よく、其道を学び、其忠君愛国の精神ハ、素（モト）より、他に譲らざるへく（ママ）、其父母に孝なる、また兄弟姉妹に友愛なるハ、云ふまでもなく、また、人の婦となるに至らバ、其貞、其節、おさ〳〵往古の、節婦、貞女に、譲ることハありますまい。又、人の母となるに至らバ、嬢等を、嬢等の父母が、愛育したると同じく、よく愛し、よく慈み、且つ、嬢等が、自から、学びたる道を以て、よく、其子を薫陶せられてならバ、今古の、賢母、慈母とならるゝハ、疑ひなき処であります。仮令、嬢等ハ、将来、如何なる境遇にたつも、畢生の行為ハ、此精神にそむくことなきハ、余の固く信じて、疑はざる処であります。これ、畢竟、嬢等が、天資の然らしむる処でありませうが、抑も、また、多年、刻苦勉励の効果と、申さなければなりますまい。

今、嬢等ハ、学業を卒へて、此校を去られますが、これからバ（ママ）、どう

」（七・オ）

して、学問をなさろうと、お思ひなさりますか。学問の道ハ、嬢等、終身、廃棄してハい

」（七・ウ）

けません。学問の光りハ、よく、世路を照らして、嬢等をして、暗夜に、彷徨ふことなからしむべし。学問の力は、よく、百難を凌ぎ、千辛万苦に堪へ、常に嬢等をして、安全の地位に、立たしむるのであります。学問の効ハ、よく、嬢等の志を達せしめ、其行ひを正し、其徳を高からしめ、凡そ、嬢等、畢生の、保護者となります。されバ、嬢等バ(ママ)どうしても、修身、学問を廃棄することハ出来ますまい。さて、学問といふものハ、師に就き、書冊を携へ、終日、之れを学業とする斗りのものでハ、ありません。幼少の時、学校に入りて、かくしたりとて、其学問の、筋道を探り、其区別を、知りたるまでのものであります。学問ハ、是迄、嬢等がなせる、方法の外、ないものと思ふてハなりません。今嬢等が、此校を去られますのハ、更に、これより、世界(ヨノナカ)といふ、大

なる学校に入るべき、進路なりと、お思ひさ(ママ)さりませ。日々に、ふむべき課業ハ、忠なり、孝なり、悌なり、信なり、皆、其学問ならざるのものハ、ありません。これ、即ち、修身の実学であります。又、其家事を、執るに至らば、自から、衛生なり、教育なり、育児なり、数学なり、裁縫なり。許多の課業を、実地に学ぶのでありませう。又、世務に、当つたならバ、或ひハ、交際し、或ハ、旅行し、或ハ通信往復をする等、即ち、文学なり、地理なり歴史なり、動植物なり、図画なり、習字なり、音楽なり、其他、総てのもの、応用の学科に、非さるものハありません。さうして、猶、書籍に就き、学ばんとならバ、其実務をなしつゝも、これをなし得べき、余地ハ、いくらもありませう。天地間、何者か、学問の資けでないものがありませう。世間、何者か、皆、己れの師でな

」（八・ウ）

いものがありませうぞ。(ママ)彼の、薪を取り、潮を汲みつゝも、和歌をくちずさみ、砂に跡つけ、蒲を編みても、文字を習ひ得たる例しがあるでハありませんか。此他、嬢等が既に、お読みなされた、史伝中、此等の類ハ、猶、いくらもありませう。況んや、嬢等ハ、生れながら、我国、貴女の地位を、保たるゝなれバ、学問をなすの余裕ハ、必ずあるでありま

せう。否々、嬢等ハ、これから、世界といふ、大学校に入りて、自から修業しなければなりますまい。只、其然ると然らざるとハ、嬢等が志ざしの、一点に存します。

更に、進んで、又、一言申さなければなりません。それハ、外の事でハありませんが、目下（イマ）の、日本婦人ハ、殊に、至難の地位に立つて居ると申すことです。嬢等も、これより、世に交るに及ばゝ、実（ゲ）に、しかあるといふことを、悟らるゝでありませう。

」（九・オ）

これ、恰も、世運の、変遷と同じく、女子の風儀も、進化する時代に於て、免るゝことの、出来ない理数にして、又、致し方ない事であります。此時に、当りましてハ只、何事も、己れを守り、道を踏み、更に、余念なき、覚悟がなければなりません。さて、女子たるものハ、先づ、優にやさしく、おほらかに恭しくなければ、いけません。例へバ、麗々のどかなる、春の花園に、吹くとしもなき風の、うち薫りて、これに、向ハん人は、心もゆるやかに覚えて、打ちも笑まるゝやうに、ありたいものです。されど、柔（ママ）かなるがよしとて、たてたる操なく、なよ〳〵として、あれかしといふのでハ、ありません。女の徳ハ、寒松の霜雪に堪へ、垂柳の暴風（アラシ）に打れぬ力にもたとへ、柔（ママ）かなる中にも、一節、犯し難き処がなくてはハなりません。総じて、内ハ剛に、外は柔なるがよろしうございます。此等の事を、記憶して、能く、これを、実施

」（九・ウ）

に施されたならバ、大なる過ちハなからうと思ひます。されど、嬢等が、よく、道を行ひて、己れに恥づることなしとお思ひなされても、世の中の人ハ口さがなく、さま〳〵の怨み嫉みにあひて、或ハ誹しられ、或ハ罵られることもありませうが、心短く、これに逆らうてハなりません。いよ〳〵詞を慎み、行ひを修めて、静かに、時を待たなければなりません。嬢等、忍耐と、寛裕と、沈勇との三つのものハ、男子の、所有のみに非ずして、却て、女子の特有物なりと、悟られよ。

以上、説く処ハ、嬢等が、此校に在つて、修学したる事の、一部分に過ぎません。されど、今、嬢等が、此校を去らるゝのでありますから、改めて、一言の蠟けをするのであり

ます。嬢等、よく、これをつとめ、時々、此精神を喚起して、造次顛沛も失却してしてハ(ママ)なりません。

」（十・オ）

今嬢等ハ、本校の生徒、幾百人に先んじて、卒業し、今日の、盛典に、あはるゝハ、真に名誉にして、且つ日本の女学生中、無上の栄誉を負ひ、又、無上の責めを、担はれたのであります。嬢等ハ、本校生徒、幾百人の模範者にして、そうして、将来、日本貴婦人の、模範とならなければならぬ、地位にたちました。若し、万一、道に戻ることもあらバ、これ、たゞ、嬢等一身の、恥(ママ)のみでありません。上ハ、畏くも我が、

皇后陛下に、対し奉りて、何の申し訳がございませうか。余も、亦、本校学監の任に居りまして、いかで、世に、面を向けることがなりませう。余の、畢生間の希望も、こゝに至つて、絶滅致さなければなりません。こゝに、これを、嬢等に契り、併せて、満堂の、貴女紳士に謝します。

」（十・ウ）

（白紙）

」（裏見返し）

」（裏表紙）

くぼ・たかこ／下田歌子記念女性総合研究所　専任研究員